

平成20年6月8日(日)
＜新しい土木計画学を考えるシンポジウム＞

土木計画学の実務への活かし方

(社)北海道開発技術センター 原 文宏

土木計画学と私の実務

- ・ モビリティマネージメント

(公共交通の利用促進、環境配慮行動の促進、ドライバーの行動変容等)

- ・ 公共交通

(公共交通の再編、新しい公共交通システムの構築など)

- ・ 地域づくり、観光等

(シーニックバイウェイ北海道、ドライブ観光など)

- ・ 学校教育(交通教育、環境教育、景観教育等)

- ・ バリアフリーやユニバーサルデザイン(冬期歩行者、バリアフリーツーリズム等)

「創る」「守る」時代から「活かす」時代の土木計画

(地域性、きめ細やかな対応、密度の濃い議論)

土木計画の現場では、論理的な解釈を伴わない場合も多い

- 「土木計画学」における実務とは、「土木計画」そのものである。
- 現場における土木計画は、行政の経験、地域住民等からの要望等から発想される場合が多い。
- そして試行錯誤の中から理由が分からなくても結果的に問題解決につながっているケースも多い。
- 一方で、なぜ解決できるのか、なぜ成功したのかわからない、他地域や他の課題解決に利用したい、でも、その解釈や理論的な説明ができない。

土木計画学は、土木計画に関わる実務者に、その実務に解釈や説明のよりどころを与える。

実務の結果を、もっと、土木計画学の場合 に持ち込むことが重要...でも

- ・実務的に見たときの土木計画学に参加する必要性。(それぞれの立場)

発注者:土木計画の業務成果を求めるが土木計画学研究を求めてはいない。

実務者:コンサルタントやプランナーは、土木計画の業務成果が、まず第一。

地域住民:土木計画学の研究は、全く求めていない。

土木計画学(研究者)と実務者・発注者・地域住民の間に敷居の低い接点を創る必要がある。

少し、気になるのは地域住民の中に、計画、社会実験、実務者(コンサルタント等)にも懐疑的な人が増えているように思う。

土木計画学が新しい土木計画 のマーケットをつくる

- 実務の面からは、当然ですが適正な報酬が必要。
土木計画に関わる費用は高いか。(予算がないから
大学にお願いする?)
- 失敗することもある。責任は?(だから、特記の通り
やったから良いのか)
- やりっぱなしの土木計画(実務)でいいのか。
(予算が無くなったら終わりか。東京とか、札幌から
時々くるぐらいで、土木計画はできるのか)

新しいマーケットの起点として土木計画学がある。
土木計画学を使いこなせる実務者と、思いや志を
持続できる実務者が求められているが....。

土木計画の実務上の課題

- 活かす時代の土木計画に関わる実務の人材が不足（行政を含めて）。特に、地方では深刻。
- いわゆる土木計画を専門とする実務者だけで、土木計画が遂行できない時代。周辺との接点。
- 成功するまで、修正を加えながら遂行できる土木計画の仕組み。
- 細やかな対応、密度の濃い議論、利害調整の支援など、費用に見られない実務の増加。
- 今の所、個人として、やりきる覚悟や志をもって、対応するしかない。